

語彙の意味場についての一考察

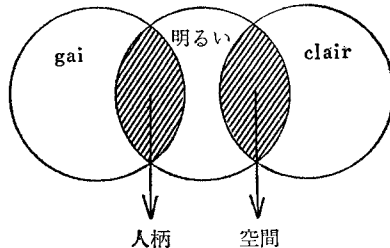
柿 山 隆

1.

先日、フランス人カトリック司祭の話を知っていると、「神が私たちに赦して下さる」という言葉を耳にした。日本人なら誰もそういう言い方はしないだろう。しかし、フランス人の口からそういう表現が出たということには納得がいくのである。フランス語の動詞 pardonner (赦す) が目的補語に人をとる場合は pardonner à+SN (人) となり、accusatif (対格) の直接目的補語ではなく、datif (与格) の間接目的補語をとる。従って、フランス語では、例えば Ces enfants sont bruyants, mais on leur pardonne. (この子供たちは騒々しい、でも彼らは赦してもらえる) と言って、²⁾ * Ces enfants sont bruyants, mais on les pardonne. とは言わないのである。フランス語で datif (与格) を示す前置詞 à は、日本語の格助詞「に」に対応すると考えられる。それ故、フランス人が、「神が私たちに赦して下さる」と言うのを聞く時、間違った日本語ではあるが納得がいくのである。逆に日本語文の「私は彼女を赦す」をフランス語学習の初心者に仏訳させると、Je lui pardonne の代りに、* Je la pardonne. の文例が見られる可能性が大であろう。日本語の格助詞「を」は多くの場合、動作の対象を示し³⁾、フランス語の accusatif (対格) に対応するからである。こういう誤訳の現象は日本語とフランス語の syntaxe (統辞法) の違いから来るものだろう。

フランス人の友人の一人が、「スープが寒い」と言った。本当は、「スー

「冷たい」と言いたかったのだ。日本語の「寒い」、「冷たい」に共通する概念は「温度が低い」ことであり、この二語はそれらを取りまく語によって使い方も異なってくる。例えば、一般的天候について言う場合は「寒い」であろうし、個別的な空気、水、風などの場合は「冷たい」であろう。フランス語では、Le temps est froid. (寒い天気だ) L'eau est froid. (水が冷たい) のように、「寒い」も「冷たい」も同じ froid で表現する。だから、日本人のほほえみを思わず誘う、「スープが寒い」などの表現が出て来るのだ。多少ニュアンスは異にするが、日本語の「水」と「湯」、フランス語の eau (水) と eau chaude (湯) の関係にもある。他方、「この人は明るい」、「この部屋は明るい」は、日本語では同じ「明るい」で表現するが、フランス語では、C'est un homme gai. (この人は明るい)、C'est une chambre claire. (この部屋は明るい) のように、同じ「明るい」でも、gai, clair, を使い分ける。この現象は、フランス語の gai, clair, 日本語の「明るい」のそれぞれの Champ sémantique (意味場) の違いから来る。これら三語の Champ sémantique (意味場) の相関関係は、例えば、下のように図式化することも出来よう。



ここに仏作文、フランス語翻訳の難しさがあるのである。

thème で目立つ誤りの中で、日本語「ヨク」をフランス語 bien ですぐ訳してしまう現象が見られる。Champ sémantique (意味場) の違いと、その相関関係を探る一例として、日本語「ヨク」、フランス語 bien の Champ sémantique (意味場) を分析し、その交わりの場、つまり、共通

する概念の場を探ってみよう。

2.

フランス語学習の初心者に、「日本の6月は雨がヨク降る」を仏訳させてみたら、その中に、* Il pleut bien en juin au Japon. とあった。このフランス語の“文”は語順から言えば間違っていないが、“文”全体は意味をなさない。* Le juin du Japon pleut bien に至っては、フランス語としては論外である。しかし、フランス語としてはでたらめなこの“文”も、日本語文法の発想からすれば理解できないわけではない。何故、フランス語学習の日本人の初心者が上述の如き“文”をつくるのか。それには日本語文法で副助詞と言われる「は」に原因の一端があるようである。日本語文法によれば、副助詞「は」は、

「(1) 他と区別する。

わたくしは、田中です。

慶応は福沢が、早稲田は大隅が創設した学校である。

(2) 強意を表わす。

さすがに秋で、もう、そう暑くはありません。」

とあって、主語を示すということは、極く補足的にしか、説明がなされていないのは、筆者の如き、学生時代に習った程度の日本語の文法の浅薄な知識しかないまま、外国語を専門にしている者にとっては、多少不思議な感じがする。それは副助詞「は」が必ずしも主語を示すとも限らないし、日本語の文においては主語が或程度軽視される傾向があるからかも知れない。いずれにしても、格助詞「が」、副助詞「は」がフランス語文法の sujet の概念に対応する場合は多いことは事実のようだ。問題なのは日本語文法の「主語」とフランス語文法の sujet の概念が必ずしも同一ではないのではないかということである。この相違が日本語の文を仏訳する場合、フランス語学習の初心者に混乱を起こす一因になっているのではないだろうか。

syntaxe (統辞法) 的文法論はさておき、日本語の「ヨク」の Champ
sémantique (意味場) を探ることにしよう。広辞苑⁷⁾、新明解国語辞典⁸⁾を参
考にすれば、「ヨク」には次のような意味の広がりがある。

「ヨク」

- ① うまく、たくみに、上手に

この学生はヨクフランス語を話す。

- ② しばしば

子供の頃、ヨク両親と旅行した。

- ③ ていねいに、気をつけて

この花をヨク見て下さい。

- ④ 時間をかけて、ゆっくりと

ヨク考えれば解ることだ。

- ⑤ すぐ

赤ちゃんはやっと歩けるようになりましたがヨク転びます。

- ⑥ 普通に、一般的に

そういうことは世間にヨクあることで、珍らしくはない。

- ⑦ 見事に、困難にうちかって

この難関をヨク切り抜けて、成功した。

- ⑧ そっくり、あたかも、ちょうど、正しく

この兄弟はヨク似ている。

- ⑨ ややもすれば、ともすれば

不幸というものはヨク続くものだ。

- ⑩ よくまあ、ようもようも

あんなことがヨク言えるもんだ。

- ⑪ 大変に、非常に

あの子はヨク勉強する。

- ⑫ …する能力がある

この学生は才知にたけているので、ヨク詩を解する。

- ⑬ (相手の)行為が結果的に望ましいことであったという気持を表わす。
ヨクおいで下さいました。

以上が上述の二つの辞書から引き出せる意味であるが、「おっしゃることは、ヨク解りました」や「ヨク降る雨だね」などの「ヨク」の意味は上の①～⑬のいずれにも当てはまらぬようである。前者には、「十分に、すっかり」の意味が考えられるし、後者には、「ずいぶん」などのような量的ニュアンスが含まれているように思われる。従って、

「⑭ 十分に、すっかり

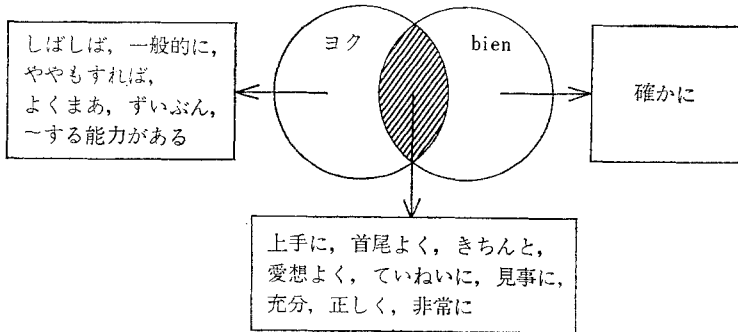
- ⑮ ずいぶん」を付け加えるべきではなからうか。

他方、フランス語, bien (adverbe) の意味域を, G. L. L. F.⁹⁾, D. F. C.¹⁰⁾, T. L. F.¹¹⁾, Logos,¹²⁾ Robert を参考にして整理してみると次のようになる。

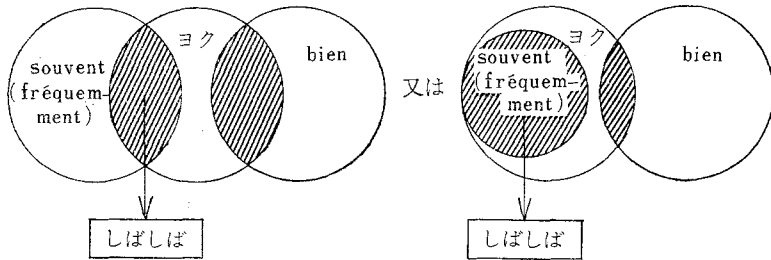
bien

- ① excellentement, habilement (うまく, 上手に, 立派に)
 Tu as bien parlé. (うまく話をしたよ)
- ② admirablement, convenablement (うまく, 首尾よく, 調子よく)
 L'affaire tourne très bien. (仕事は大変うまく行っている)
- ③ correctement, logiquement (きちんと, 理整然と)
 Il a bien tondu sa démonstration. (彼は理整然と証明をした)
- ④ assurément, certainement (確かに, ちゃんと)
 J'ai bien téléphoné, mais vous n'étiez pas rentré. (確かに, お電話したのですが, お帰りではありませんでした。)
- ⑤ dignement, admirablement (ちゃんと, 愛想よく)
 Elle a bien reçu le visiteur. (彼女は愛想よく訪問者をもてなした。)
- ⑥ à l'aise, tonfortablement, heureusement (快的に, 快調に, 気持よく)
 On vit bien dans ce quartier. (ここの住み心地はいい。)
- ⑦ très, fort (大変, 非常に)
 Je suis bien content de vous voir en bonne santé. (お元気な姿を拝見して, 大変うれしく存じます。)

以上のことから、日本語の「ヨク」とフランス語の bien の champ sémantique (意味場) の関係は下の図のように示すことが出来る。



「ヨク」と bien の champ sémantique (意味場) の関係は、「ヨク」≡ bien の合同の関係ではなく、「ヨク」∩ bien の交わりの関係であろう。従って、「ヨク」と bien の交わりの場に含まれる「上手に、首尾よく、きちんと、愛想よく、ていねいに、見事に、充分に、正しく、非常に」の概念は、日本語の「ヨク」によっても、フランス語の bien によっても表現できるであろう。他方、日本語の「ヨク」の「しばしば、すぐ、一般的に、ややもすれば、ずいぶん、…する能力がある」の概念はフランス語の bien では表現できないだろうし、又逆に、フランス語の bien の assurément (確かに) の概念は、日本語の「ヨク」では表現できないだろう。「日本の6月は、ヨク雨が降る」を * Il pleut bien en juin au Japon. と訳したのは、日本語「ヨク」とフランス語 bien の champ sémantique (意味場) を合同の関係と考えたことにあるようだ。「日本の6月は、ヨク雨が降る」の「ヨク」は「しばしば」の意味であり、上の図でも示した通り、フランス語 bien では「しばしば」の概念は表現できない。頻度の多いことを表わす、日本語「しばしば」の概念を表わすフランス語には、souvent, fréquemment が考えられる。「ヨク」、bien, souvent (fréquemment) の ch-



amp sémantique (意味場) の関係を上のように示すことが出来よう。
 従って、「日本の6月は、ヨク雨が降る」を仏訳すれば、例えば、*Il pleut souvent (fréquentement) en juin au Japon* のようなフランス語の文が考えられるだろう。

3.

日本語とフランス語は、それぞれ異った文化の中から生れ、異質の言語体系をもっているが故に、逐語的訳はおおよそ不可能である。フランス語学習の初心者にとって、仏作文、仏語翻訳の難しさは、両言語間の *syntaxe* (統辞法) の違いであり、更には、日本語の語彙とフランス語の語彙の *champ sémantique* (意味場) の違いでもあろう。例えば、ある場合に、日本語の語彙 A に対応するフランス語の語彙 B が他のすべての場合に於ても全面的に対応することは殆んどあり得ないことだろう。それは、日本語の語彙 A とそれに対応するフランス語の語彙 B のそれぞれの *champ sémantique* (意味場) の広がり完全に重なることは、なかなかないからだ。それ故、日本語の語彙 A の *champ sémantique* (意味場) は、それに対応するフランス語の語彙 B のそれとは、多くの場合、 $A \equiv B$ のような合同の関係ではなく、むしろ、 $A \cap B$ のような交わりの関係であろう。従って、語彙の点から見れば、的確な仏作文、仏語翻訳は、先ず、両言語の語彙間の交わりの場を見極めることにあるだろう。

他方、フランス人(外国人一般にも言えると思うが)が日本語を学ぶ場合はどうだろうか。彼等にとって難解なのは、*syntaxe* (統辞法) の質的

違い、とりわけ、日本語文法で助詞と言われる、mots fonctionnels (機能語) だろう。印欧語族の人たちに理解してもらえるように、如何に、それらを説明して、彼等の日本語の compétence (言語能力) を確実なものにするか、日本語での彼等の会話、作文の performance (言語運用) を、どのようにして、より容易に高めてあげることができるか、言語にたずさわる日本人すべての課題であろう。

注

1) Dictionnaire du français contemporain, Larousse, voir pardonner.

2) *印はフランス語文としては正しくないことを示す。

3) 簡明国語文法, 日栄社, によれば, 格助詞「を」は

「①動作の対象を示す。

泉のわく所へ来た。姉は木の腕を出して清水をくんだ。

② 動作の起点を示す。

ノラはついに家を出た。

③ 経過する場所, 時間を示す,

この川をさかのぼると, すばらしいながめが展開します。

彼女は一生を不幸の中に送った。」

とある。これからすれば, 格助詞「を」は必ずしもフランス語文法機能の accusatif (対格) を示すものでもないようだ。只, 直観的に疑問に思うのは, 「彼女は一生を不幸の中に送った。」の「を」は, 動詞「送る」の動作の対象を示してはいないかということである。いずれにしても, 上述の分類は明析さを欠くきらいがあるように思われる。

4) 簡明国語文法, 日栄社

5) 日栄社の「簡明国語文法」によれば

『「わたくしが, 田中です。」「わたくしは, 田中です。」の下線部は, どちらも主語であるが, 「が」が単に主語を示しているだけで, 何か意味を添えるということがないのに対して, 「は」の方は「このわたくしは」というふうに特に取り上げて強調するはたらきをもっている。』この説明にも直観的に不自然さを感じる。日本語の文においては, 主語は必然的に「が」又は「は」を取る。従って, 意図的に強調することが全然なくても, 主語を示す文法的必然性の故に「は」を用いるケースだってあり得るのではないか。例えば, 「日本はアジアにある。」と「日本がアジアにある。」の二つの文をとってみよう。「日本が……」の「が」の場合は, 前出の Contexte がないと使えないだろうが, 「日本は……」の「は」は前出の Contexte なしに言えるので

ある。前出の Contexte がない場合は必然的に主語を示すものとして「は」を使わざるを得ないであろう。又一方、「が」は「単に主語を示す」と説明されているが、「私はそれをしました。」と「私がそれをしました。」とでは、「私」を強調するのは「私は」よりもむしろ「私が」の方の感じがするであろうか。最近、外国人にも、日本語の主語を示す「は」と「が」の違いに関心を示す人がいるようだが、「は」よりも「が」の方に強調のニュアンスを汲みとる場合が多いようである。

- 6) 日本文法大辞典(松村明, 明治書院)によれば, 形態的に格助詞「が」を伴って文中に現われる部分(副助詞「は」を伴うものについては, 述語との関係がもし格助詞を使うなら「が」を用いるような場合)を主語としている。例えば, 「花が咲く。」「その命が欲しい。」、の下線部, 「花が」, 「その命が」はそれぞれ主語ということになる。他方, フランス語では qui est-ce qui 又は qu'est-ce qui の質問に答える語を sujet と言うとしているが, この定義だけでは, すべての sujet をカバーできないと, Grand Larousse は付け加えている。事実, sujet の基準についてはいくつかの学説がある。いずれにしても, 「花が咲く。」を仏訳すれば, 動詞「咲く」の主体が花であるから, フランス語においても, 「花」(fleur) が sujet であり, La fleur s'épanouit. というような文例が考えられよう。しかし, 「その命が欲しい。」については, 「欲しい」の主体が「その命」とは考えにくい。フランス語の伝統的文法による fonction (機能) の考え方からすれば, 「その命」は「欲しい」の complément d'objet direct (直接目的語) だと直観的に考えるだろう。それならば sujet はということになれば, 「欲しい」の主体としては, 文の表面には, 見えない「私」もしくは「我々」が考えられるだろう。つまり, フランス語の syntaxe (統辞法) からすれば, 日本語の文「その命が欲しい。」では, フランス語訳した場合, 日本語に於ては, sujet は structure de surface (表層構造) には現われていないことになるだろう。従って, この日本語のフランス語訳として, Je veux sa vie. (Nous voulons sa vie. On veut sa vie.) は考えられても, *Sa vie veut は絶対にあり得ないのである。

- 7) 新村出, 広辞苑, 岩波書店
- 8) 金田一京助, 新明解国語辞典, 三省堂
- 9) Grand Larousse de la langue française.
- 10) Dictionnaire du français, Larousse.
- 11) Trésor de la langue française. C.N.R.S.
- 12) J. Girodet, Logos, Bordas.